

恋叶ロード（真玉海岸）活性化基本構想での 真玉海岸生きもの調査の位置付けについて

株式会社 キョウワ 正会員○山田有一
非会員 舩巴雅喜 松成哲生
豊後高田市 商工観光課 非会員 河野真一 井上重信

1. はじめに

令和3年度に豊後高田市は「真玉海岸」の観光資源を最大限に活かし、観光拠点化を通じて地域振興を図るため、恋叶ロード（真玉海岸）活性化基本構想を策定した。当地域における誘客促進施設の整備、及びその活用方法など、誘客促進に資する基本計画を定めた。

この恋叶ロード（真玉海岸）基本構想の中で、誘客促進拠点施設は「分散型」社会に対応する拠点施設として策定された。構想の中で、拠点施設に、多くの誘客促進施策を計画している。生きもの調査は、自然環境の持続可能な取り組みとして、その施策の中で海岸環境を守りながら、地域振興を図る位置付けとなっている。

真玉海岸の生きもの調査は、平成8年8月に大分県高田保健所が「真玉干潟を考える中学生シンポジウム」を開催している。当社は、平成28年に20年後の生態変化観察のために、真玉干潟生きもの観察会を行い、真玉中学校2年生20名、NPO、マリンパレス等とともに生きもの調査を行った。

真玉海岸生態の変化内容と今後の基本構想における生きもの調査の位置付けを明らかにする。

2. 平成8年、平成28年の20年間での生態の変化

(1) 平成8年、平成28年の調査結果の違い

- ①貝類：平成28年ではハマグリ、マテガイは採取できたが、平成8年採取のアサリガイ、カガミガイ、バカガイ等の二枚貝が採取できなかった。
- ②エビ類：クルマエビ等3種のみで採取で、平成8年採取のシャコ類は採取できなかった。
- ③ゴカイ類：平成28年は採取できなかった。

(2) 平成28年の調査結果の特徴

平成28年調査結果は以下のとおりである。

- ①二枚貝類が激減していた。
- ②ナルトビエイの二枚貝捕食の跡が多く見られた。
- ③エビ類が激減していた。 (写真-1)



写真-1 丸い水たまりがナルトビエイの捕食跡

3. 生きものの変化と気候変動・環境変動の考察

(1)NPO（大分田んぼ里山ネットワーク）意見

- ①地球の温暖化（ナルトビエイの回遊） ②海岸線の形状変更（2ヶ所）－(図-1)

(2) 地元住民の考える変化理由意見

- ①砂が増え、磯が減っている。磯で貝が産卵していたので、貝は減った。
- ②A、B2ヶ所の土木工事によって、20年間で干潟の砂のつき方の状況が変わっている。

(3) マリンパレス意見

- ①中津干潟に比べて砂地の多い特徴のある干潟である。
- ②平成8年、28年生きもの数の変化比較表(表-1)は、以下のとおりで、種は変化した、豊かな海岸である。

	魚類	貝類	カニ類	エビ類	ヤドカリ類	その他無脊椎	計
H8	5	15	8	5	3	5	41
H28	8	13	7	3	3	2	35
計	+3	△2	△1	△2	±0	△3	△3

表-1 H8、H28生きもの種数比較表

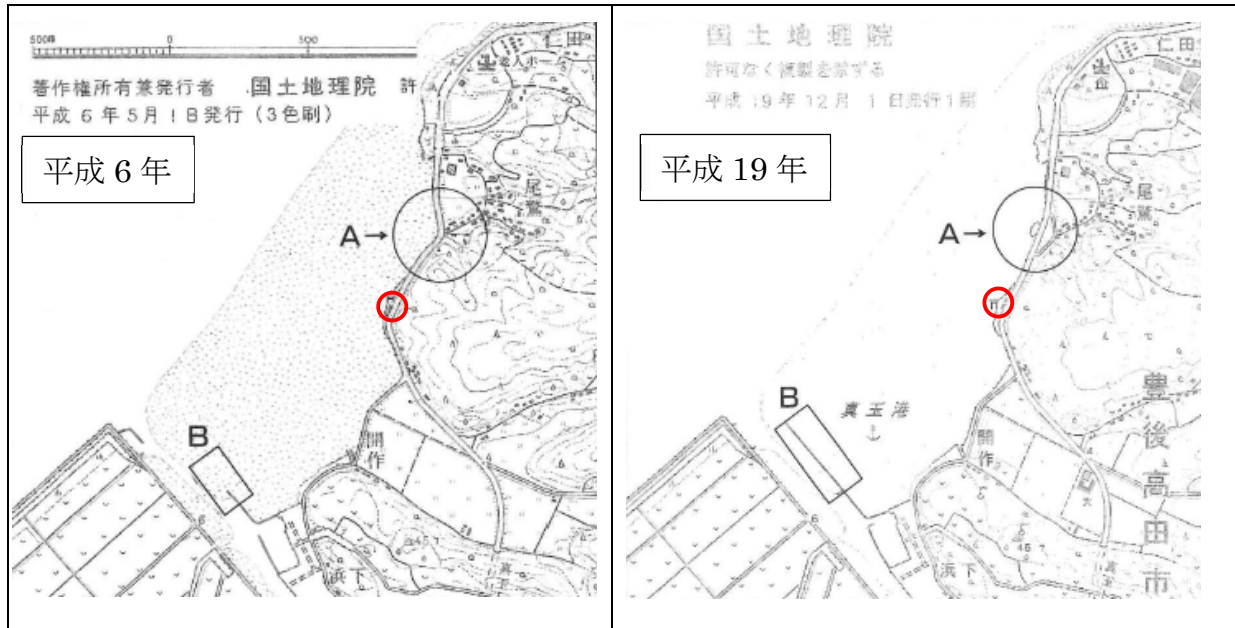


図-1 海岸線形状の変化

○: 誘客促進施設建設地(令和 5 年 3 月完成)

4. 誘客促進施設の構想と自然共生社会

誘客促進施設は、これまでにない「夕陽を愛でる」という独自のコンセプトで計画されている。

(1) 夕陽を愛でる日本一の聖地

国東半島は九州の東の行き止まりである。しかしその行き止まりには見事な夕陽がある。「半島の行き止まり」に「明日への希望」の予感があるというコンセプトである。

つまり、当施設の整備基本コンセプト(図-2)は、

『日本で、唯一の「行き止まりの夕陽」を愛でる人達が、集える施設として機能すること』である。

(2) 新感覚「憩いの駅」へ

「人々が憩えるかけがえのない場所」を作ろうとする人々の協働活動は、多くの人々の共感を呼び、次世代に引き継がれる分散型社会の地域活性化活動を支援する役割を果たす。その施設は、人々が憩えるかけがえのない場所となる。自然環境が有する多様な機能を活用して、時間とともに、人と自然の触れあい活動の場が増し、人々の心の「憩いの駅」となることを、当施設は目指している。

5. まとめ

新たに建設される「真玉海岸」誘客促進施設は、分散型社会の中心拠点施設として、真玉海岸の「夕陽を愛でる」特性に配慮した魅力的な景観形成を図ることとなる。生きもの観察会は、その地域を活性化させる地域活動であり、「真玉海岸の継続的な環境活動の実施」という環境を大切にする考え方の一環として位置づけられる。

真玉海岸での 20 年間隔の生きもの調査比較の結果、20 年の歳月は干潟の生態に変化を生んでいた。

今後は、地球温暖化が進展し、生物への温暖化の影響が懸念される。そのため、真玉海岸の自然遷移の方向は、これまでの 20 年のように、さらに人間の予想と異なるものになっていくだろう。

自然景観を大切にする新施設では、「真玉干潟にいる生きものを知っている」ことが大切な前提となる。生きもの観察会という、順応的管理により、海辺の自然再生を常に図っていく必要がある。

生きもの観察会という地道な活動が起点となり、分散型拠点施設としての誘客促進施設が、未来へさらなる予想以上の成長を遂げていくものと考えている。

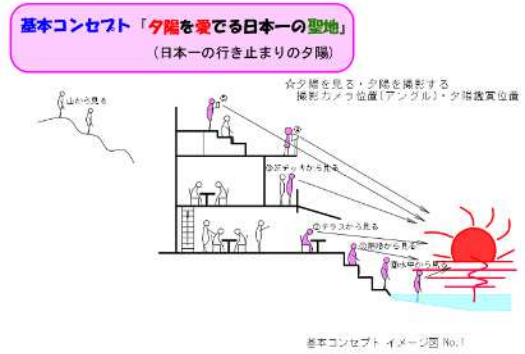


図-2 整備基本コンセプトイメージ